日本人とアメリカ人の挨拶行動 Ⅱ

——別れの挨拶——

小　林　祐　子

Ⅰ　はじめに

いかなる対話行動においても，それにかかわる人間の関心は，たとえ目の前の話題に専ら向けられているようでも，同時にその基底では自分がどのような存在として認められているか相手の評価に敏感に反応し，発話のもっていき方やことばづかいにたえず微調整を加えている。この種の潜在的関心は，相手の対応が予測しがたい相互作用の始めと終りにもろに前面におしだされる。このような不安定な状況に対し，社会の側は一定の筋書きを定め，台本を用意し，安んじて肝心な接触の目的が果たせるような便宜をはかっている。それがいわゆる「挨拶」で，われわれはその台本に従って，それぞれの状況にふさわしい「せりふ」を選んで，与えられた社会的役割を演じ，人間関係・社会関係の維持をはかっているといえる。接触時のこの儀式化されたやりとりはどの社会にも見られる普遍現象といわれる。しかし，その普遍性のなかにも，接触の「舞台」のために各社会が用意した「台本」には単なることばの違いをこえて，社会構造の違いに根ざす個別性が認められる。この個別性が日本人とアメリカ人の挨拶行動のどの部分にどういう形で認められるか。これが筆者の近年の研究テーマの一つで，「出会いの挨拶行動」については，比較対照した結果を不十分な形ながらまとめ，本誌42巻に発表した。本稿はその第二部として，「別れの挨拶」をとりあげたものである。

Ⅱ　目　　的

研究の目的をのべる前に，「別れの挨拶」として取扱う儀礼行動の範囲を明確にしておきたい。日本語の「別れ」ということばは，英語の leave-taking よりもその意味範囲がやや限定的で，外出，出勤，登校などによって家族間に生じる接触の一時的なとだえを「別れ」の範疇に含めないのが普通である。事実，一般の「別れの挨拶」と区別した特別の挨拶語を用意している。とはいえ，そこでかわされることばもまた人のもとを離れる際の挨拶行動に違いなく，ここではこれらも含めた知己間の leave-taking ritual 一般を考察の対象とする。

挨拶行動では，出会い別れを問わず，非言語要素の働きが大きい。その意味で言語・非言語の両側面からの研究が求められるわけだが，資料的にも後者を体系的に扱う用意が整って

いないので本稿では非言語的要素にふれないことを断っておく。

言語的要素に限定した「別れの挨拶」に関して，特に明らかにしたい点は次の３点に要約される。すなわち，日本人とアメリカ人の(1)日常会話における「別れの挨拶」交換の位置づけ，(2)挨拶表現の種類，(3)挨拶表現の選択規則の各々である。これらの調査研究を通じ，最終的にねらいとするところは，日本人とアメリカ人の「別れの挨拶」に関する記述的な民族誌的情報をまとめ，その比較対照を通して両者の類似点，相異点を浮かびあがらすことである。

「別れの挨拶」研究はこれまでに「出会いの挨拶」と対(ツイ)にし（Firth，1972），あるいは広く儀礼行動の一部として（Ferguson，1976；Goffman，1971），文化人類学，社会言語学，社会学の各分野でおこなわれてきた。わけても Goffman は，出会いと別れの挨拶を人間関係維持のための supportive rituals の一環として位置づけ，これらを対人関係に重要な意味をもつ access（接触の可能性の難易度）の観点から包括的にとらえ，その社会性を明確に定義づけ，挨拶研究に骨太な基盤を提供している。この他，「別れの挨拶」を個別に取扱った研究としては，近年 ethnomethodology の急速な発達と共に，会話研究の一部として会話終結部の言語行動の記述・分析が見られる。なかでもアメリカ人の電話の会話の「別れの挨拶行動」に多くの研究成果が見られる（Schegloff & Sacks，1973；Albert & Kessler，1978；Clark & French 1981）。

これらの挨拶研究が示すことの一つは，挨拶というごく日常的な儀礼が見かけの単純さとは裏腹に，簡単なときあかしを拒む複雑な構造をもつということである。今回の分析のこころみも，その解明作業のごく限られた一部として位置づけたい。

Ⅲ　調 査 法

Ⅱに示した研究目的にそった調査法としては，実験観察，自然観察，調査票利用など色々考えられるが，実施の点でかなりの困難が伴うために，本研究ではＴＶドラマ，映画を資料として用いることにした。演技上の「挨拶」という限界はあるが，日常性の濃いドラマにはそれなりの現実の投影をみることができよう。ただ挨拶表現の選択規則を見ることを目的としながら，期間中利用できたＴＶドラマの場面に制約されるという不可避的問題を背負いこんでいる。従って「片寄り」が懸念されるところでは，それなりの指摘をおこなっている。

アメリカ人に関する資料（以下㊋資料と略）として用いたＴＶドラマと映画は，筆者がロスアンジェルスに滞在していた1979年10月から1980年３月の期間中に放映されたもので，延べ時間にして約56時間分である。その内訳は，ＴＶドラマ30分もの16本，60分もの15本，映画90分もの２本，120分もの15本である。[1] 日本人に関する資料（以下㊐資料と略）は，1979年12月と1980年７月に放映されたテレビ60分もの21本，延べ21時間分である。[2]

以上の資料はテープにとり，別れの場面とその前後をおこして書体に置換え，これを場面ごとに通し番号をつけたカードにうつしとり，対話者，場面的状況を附記し，分析に用いた。この過程でききとり不能のもの，別れの挨拶が途中でカットされたのではないかと疑義のもたれるものを除外したため，最終的に用いた場面数は㊐100，㊋156となっている。なお，本稿では面識のある間柄の挨拶に考察対象を限定しているので，ここには接客サービスの営業用挨拶場面は入ってない。

Ⅳ　会話の終結部と挨拶の位置づけ

「別れの挨拶」交換は必らずしもすべて会話の一部としておきるものではない。出勤・登校の際の家人との挨拶，下校・退社時の仲間との挨拶などは，互いに「定型」の交換のみで会話を伴わないことがある。しかし，これらは別れの型としてはむしろ例外的で，一般には何らかの話合いが先行する。そこで問題となるのが会話の中の挨拶の位置づけである。

会話は挨拶で「始まる」開始部，話合いの中核をなす話題進行部，挨拶で「終る」終結部から成るといわれる。たしかに会話が挨拶交換で「終る」のを認めるのは容易だが，その挨拶がどこで「始まる」かは必らずしも明らかではない。出会いの場合と異なり，別れではいわゆる挨拶交換としてその第一連鎖にあらわれる言語要素が一定しておらず，言語形式の上からその起点を見定めることがむずかしい。従って，要件伝達の終りから会話の最終連鎖までの言語行動を機能の上から類別化し，挨拶の範疇に属する言語行動がどの位置に典型的に出始めるか会話の流れのなかでおさえることが必要になる。この場合，挨拶の範疇に属する行動とは，“goodbye”など社会関係再確認の「定型」交換はもとより，その関係の維持強化をはかる慣習化された一連の儀礼行動を含むものとする。

㊐㊋資料の中から挨拶に先行する会話進行部をもたないサンプル㊐14，㊋26を除いた残り，㊐86，㊋130について，終結部におきる言語行動を調べた結果は次の通りである（表―1参照）。

まず資料の中には要件伝達と共に会話が終了し，挨拶交換のない接触が認められる（表―1，型―4，5，7）。この種の終了の型は，日常業務の遂行上繰返しおきる接触では一般的で，非役割関係的接触でおきた場合にのみ，不調和な人間関係を示す（型―7㊋）。但し，「他人行儀」を拒む日本人間の特に親密な間柄では挨拶ぬきの友好的別れもあり得る（型―4㊐）。

次に挨拶交換で終る会話において，要件が満たされた時点から会話最終点までに集中的におきる言語行動を類別化すると，会話終了への意思表（暗）示と別れの符丁的合図という接触終了の言語操作と，相互関係の円滑油的働きをする関係維持への意思表示，相手の well-being に対する祈念，相互の関係にもたらされた接触の影響（感謝，詫び，満足）などが見

られる。

これらの諸言語行動のうち，相対的位置が定まっているのは，会話終了への意思表（暗）示で，挨拶要素に先がけて要件伝達終了点に位置をしめる。[3] 複数の挨拶要素が同時に用いられる場合，挨拶要素間の配列順序に規則性は認め難く，一般に terminal exchange といわれる符丁的な「定型」も，必らずしも最終位置を占めてはいない。ただ挨拶要素のうち1つだけが選択される場合に，「定型」が選択される率が㊐86%，㊥77%と高く，それだけ他よりも最終位置を占める率が高くなっている。

会話終了の意思表（暗）示は，ただちにあるいは何回かのひきのばしを得て応（黙）諾され，その時点で挨拶要素が出現の機を得ている。この意味で終了への合図は挨拶行動の先導的役割をつとめているといってよく，Schegloff & Sacks (1973) はこれを "pre-closing technique" と名付けている。とすれば，別れの挨拶行動とは pre-closing 連鎖完了後の会話終結部に生じる一連の儀礼行動ということができよう。

Pre-closing 連鎖に先導されない挨拶語の使用（型—6）は，会話の一方的打切り手段として用いられている場合が多く，そこでは挨拶本来の機能は失われている。挨拶が友好的な社会関係再確認として機能するには，会話を終らすことに当事者の同意が必要であり，その意味で会話の "pre-closing" 段階は "closing" と同じ重要さをもつといえる。

資料中の会話終結部は日米共にその7割前後が終了への意思表（暗）示→応諾〔P〕と，これに続く挨拶→挨拶〔F〕の2段階から成っている（型—1；型—2）。この場合挨拶〔F〕には1～3連鎖にわたる長さのヴァリエーションが含まれる。この標準型を「無標」の終結型とし，他の終結型と並べて示したのが表—1である。

このなかで日米間に相異が認められるのは，「感謝表現」〔T〕の挨拶機能で，㊥では終結辞としてこれが単独に用いられた場合，友好的挨拶機能に乏しく (Clark & French, 1981)，「ビジネスライク」の「有標性」をおびる。これに対し，会話のこの位置におきる感謝表現は日本では友好的しめくくりとなり得る。

表—1 会話終結の型

終結の型		例数		%		例	
		日	米	日	米	日	米
1	P→F	58	87	67.5	66.9	A：どうですか奥さん，たまには…… B：えゝありがとうございます。じゃ宏とよく相談しまして。 A：それじゃ，いずれまた。ごめん下さい。 B：おかまいもしませんで。	A：Well, it's time I was going. B：Must you? A：Yes. I've enjoyed seeing you very much. B：You must come again. A：I will. Goodbye. B：Goodbye.

2	P→F 話題再開→F	5	9	5.8	6.9	A：…山へいってきたの？ B：いえ，これから。ジャーどうも。 A：ジャー。あゝ。あのお母さまお元気？　此頃あまりおみかけしないけど。 B：えゝ元気です。 A：そう。 B：さよなら。 A：さよなら。	A：OK, thanks. See you later. B：Listen. Next time you want some home cooking and dignified sex, don't go to strangers. A：That's a deal. When can I see you again？ B：Not till tonight. Goodbye, Charlie. A：Goodbye, Annie.
3	P→T	7	2	8.1	1.5	A：では，ここで失礼します。 B：お送りしましょう。 A：いや，結構です。いろいろありがとうございました。 B：イヤイヤ。	A：Well, I'd better be running along. Thanks for the coffee. B：See you.
4	P→φ	2	4	2.3	3.2	A：ジャー他にちょっといくところがあるから。また，連絡するヨ。 B：アー。	A：I must be getting off. I want you to try to get some rest, Mrs. King. B：(nod)
5	φ→T	3	10	3.5	7.7	A：アノー，それからお車は秘書の方で用意するそうでございます。 B：あゝご苦労さん。 A：（目礼，退出）	A：When you have everything packed, please let me know. I'll send a man up to carry things to your car for you. B：Thanks. I'd appreciate that. A：No problems.（退出）
6	φ→F	3	12	3.5	9.2	A：…なぜ，なぜいかなかったのかッ。 B：参加不参加は本人の自由なんだ。お休みなさいッ。(退出) A：ヒロシ！	A：I don't want to pry into your affairs but I'd rather you didn't say anything at all and be dishonest. Good night. B：Oh, wait, wait a minute.
7	φ	8	6	9.3	4.6	A：汽車の切符は田中君にとどけさせる。 B：ハイ。 A：それまでに仕事を片付けておくように。 B：かしこまりました。（退出）	A：I will not be a party to bringing Julie back here to put her through one more emotional crisis. B：I certainly hope you're not going to regret this decision.（退出）
	合　計	86	130	100%	100%		

(P)re-closing ……終了意思表示
(F)arewell ……別れの挨拶
(T)hank-you ……感謝表現

V　挨拶表現

会話の中の「別れの挨拶」の位置に，どの種の表現がどのような頻度でおきるか，次に資

料にもとづいて考察をすすめたい。

社会慣習によってとりきめられた挨拶ことばは，意味の稀薄な形式的表現とはいえ，人間関係のための supportive rituals として，その社会の人間関係のあり方を示唆する素材を提供している。日本人，アメリカ人の各々が，再会までの接触のない期間にむけて，どのようなことばを用いて，相手との関係調整をはかるか，資料の分析結果をまとめて以下に示すこととする。

1．「定型」

1．1．種類と使用頻度

出会いの場合と同様に，「別れの挨拶」にも符丁的合図に近いものと，相互関係の円満維持に寄与する一定の意味内容をもった慣習的表現との二種があるといわれる。便宜的に前者を「定型」，後者を適切な名称がないまま「準定型」と呼ぶこととする。英語においては，「定型」が極端な省略表現から成り，その形も完全に固定されている一方，「準定型」は常套的とはいえその意味内容のもりこみ方には個人裁量の余地が残されており，両者の間にかなりはっきりした違いが見られる。これに対し，日本語では挨拶表現全般が「きまり文句」で固定化され，「定型」一色の観が濃い。ここでは日英語の比較対照の観点から，英語の「定型」に機能的に対応するものを，いささか恣意的に「きまり文句」の中から「定型」として選ぶこととした。表―2に示すのは，資料の中から得た日米の別れの挨拶の「定型」とその使用回数である。

表―2　別れの挨拶定型の種類と使用回数

	「定　型」の種類	回　数		「定　型」の種類	回　数
日	さよなら	6	米	goodbye	85
	ジャー（その異形）	21		bye-bye	8
	ジャーマタ（〃）	4		bye	10
	ドウモ	9		good night	61
	お休み（その異形）	10		good day (afternoon) (evening)	6
	いってきます（〃）	8		so long	6
	いってらっしゃい（〃）	10		see you 4)	17
	失敬	4			
	失礼します	20			
	ごめん下さい	5			
	計	97		計	193

まず「定型」各種の相対的使用度をみると，㊐では，「ジャー」と「失礼します」が，「さよなら」の3倍強使われ，後者の使用が比較的低いことを示している。㊋では“good-bye”と“good night”に使用が集中し，両者あわせて「定型」使用の75.6%を占め，使用の分散する㊐と際立った対照をなしている。

次に，「別れの挨拶」における「定型」の使用度に目を向けたい。先に「出会いの挨拶」において，アメリカ人の間では「定型」が社会関係の認知手段として重要な意味をもち，不適当な「定型」の使用や，使用回避が社会関係に大きく響くことが認められた（小林，1981，pp. 101—105），出会いにおける「定型」の使用率92%という数字が，「定型」の挨拶要素としての不可欠性を物語っている。これに対し，日本人の場合は挨拶要素として「定型」に依存する度合が低く，その使用率はアメリカ人の約½であった。別れの場合はどうであろうか。

これを見るために，挨拶交換例を連鎖の数で分類し，各々少なくとも1回「定型」の使用が見られたものと皆無のものとの割合を出すことにした。その結果を示したのが表—3である。これで見ると，㊐の「定型」使用度は平均して83.4%と出会いの場合よりかなり高くなっている。もっとも，出会いの挨拶では「定型」として認めなかった「ヤアー，どうも」といった瞬昧表現や「準定型」に分類することも考えられる「失礼します」を「定型」に含めてのことである。

㊥の「定型」使用率は平均84.7%と出会いのときより低くなっている。しかし挨拶交換の長さが3連鎖の場合，使用率は出会いとほとんどかわりなく，低下は特に1連鎖で終る交換例に出ている。これはアメリカ人がひとことで挨拶をすます場合，親しい間柄では“goodbye”よりも“Have a good day.”“Take it easy.”“See you later.”といったより友好的な「準定型」表現を選ぶ傾向にあるためと考えられる。

表—3　別れの挨拶における「定型」使用度

挨拶の長さ	定型有無	数		%		例	
		日	米	日	米	日	米
一連鎖	有	44	33	86.3%	76.7%	A：失礼します。 B：ご苦労さん。	A：Good night, Jim. B：Good night, Mrs. Delaney.
	無	7	10	13.7%	23.3%	A：じゃお大事に。 B：ありがとうございました。	A：I'll call you tomorrow. B：OK. Take it easy, Sam.
	小計	(51)	(43)	(100%)	(100%)		
二連鎖	有	17	57	73.9%	86.4%	A：いづれまた。 B：おかまいしませんで。 A：ごめん下さい。	A：Have a good trip. B：Yeah. A：Bye-bye. B：Bye.
	無	6	9	26.1%	13.6%	A：ごめいわくおかけしまして。 B：イヤイヤ。 A：どうぞ先生によろしくおっしゃって下さい。 B：ハイハイ。	A：You call me when you need me. B：OK, Rod. A：Take care. B：All right.
	小計	(23)	(66)	(100%)	(100%)		

三連鎖	有	9	20	90.0%	91.0%	A：失礼します。 B：またこんどごゆっくり。 A：ありがとうございます。では。 B：どうぞお気をつけになって。 A：お休みなさいませ。 B：お休みなさい。	A：Goodbye, pet. B：Goodbye. A：Have a good time. B：Thanks. The same to you. A：And don't forget to write.
	無	1	2	10.0%	9.0%	A：年末のお忙しいところ，わざわざありがとうございました。 B：イヤイヤ。 A：お帰りになりましたら会長によろしくお伝え下さい。 B：はい申し伝えます。 A：どうぞよいお年を。 B：よいお年を。	A：Don't take it too hard, Mary. B：No, I won't. A：You do a good job in other ways. B：(shrug shoulders) A：See you on Monday.
	小計	(10)	(22)	(100%)	(100%)		
合計[5]		84	131	—	—		

1．2．表現の特徴

表現の比較で第一に浮かびあがる日英の相違は，英語の挨拶が主として相手に神の加護や良き時を願う祈念の性格が強いのに対し，日本語の場合は祈念的要素が一切なく，去就のフィジカルな動きを文字通りにのべたものが多いということである。

英語の“goodbye”及びその省略形“bye”（幼児用に繰返しのついた“bye-bye”）は，相手に神の加護があることを祈念する“God be with you.”の省略形である一方，<good＋時>は，これから過ごす時が快適なものであることを祈念する“May you have a good ～(time).”の省略形といわれる。くだけた挨拶“so long”も，*Fowlers Modern English Usage* によれば，相手に幸運を祈る“Good luck till we meet again.”の意味内容をもつ省略表現とされる。また一説によれば，イスラム教徒の平和祈念“salaam”(Peace to you) からでた表現とも云われる。これら welfare wishes に対し，“see you”のみが系列を異にし，「準定型」で使用度の高い関係維持を示す“I'll see you〔時・場所〕.”の省略表現となっている。

これとは対照的に日本語ではおよそ自明な動作をただのべて挨拶としている。「行ってきます」は英語に直せば“I am about to go.”であり，その応答「いってらっしゃい」は“Go.”「お休みなさい」は“Please rest.”と，相互にただ動作を確認しあうところで挨拶が成りたっている。

「失礼します」も，その場を今や立ち去ると相手にただ告げるという点では，「いってきます」と変わらない。相異は相手に対しその行為が非礼になることを認識していることを示している点である。

「サヨナラ」は一見，これらとは系統の異なる挨拶に見える。しかし，その成立を遡れば，「左様ならば，これにて失礼申しあげます」から生まれた省略表現で，前者と流れを一にする。興味深いのはその省略法で，別辞の中心部を削りおとし，冒頭の接続詞だけを残している点である。会話の中の挨拶の位置づけのところで指摘した通り，一般的な接触は儀礼上協調的に終らすことが求められており，別れの本格的な口上をのべるに先立って，終了導入の「地ならし」が必要とされる。「地ならし」として重要な会話方向転換を合図する「左様ならば」が挨拶として独立したのが「サヨナラ」で，「ソレジャー」「ジャー」もこれに準じる。後者2つは，「サヨナラ」と異なり，接続詞としても「現役」である。そのため，会話のおわりなどの挨拶では，表立った「サヨナラ」よりも目立たぬ接続詞兼務の「ジャー」が好んで使われる傾向にある。こうして見ると，日本語の挨拶「定型」は，相手に積極的な働きかけを示すより，互いに自明なこと——自明のあまり肝心の部分の省略も可能——を共通に認め合うことによって，相互関係再確認の合図とする特色をもつといえよう。

2．「準定型」

2．1．　種類と使用頻度

「別れの挨拶」の基本的な働きは，単に接触を協調的に終らすだけではなく，接触の終りが相互の社会関係の終りを意味するものでないことを確認しあい，再会への道を開いて関係の維持をはかることにある。ただひとこと発した「お休み」だけでもその機能は発揮され得るが（無言の別れと比較するとその働きがはっきりする），多くの場合，社会慣習はそれ以上の友好関係の「あかし」を求める。この種の「あかし」を含む儀礼表現をここでは「定型」と区別し，「準定型」と呼ぶこととする。すでに1．1．の「定型」の定義の際にふれた通り，日本語では挨拶一般の規定性が強く，きめられた口上をきめられた場で正しく使うことが儀礼上重要とされる。これに対し，アメリカで慣習がきめるのは表現のタイプであって表現そのものではない。その場が求めるタイプにピッタリの生き生きした表現をどれだけ生み出せるかに重点がある。こうした両者の違いから，同じ「準定型」といっても表現の固定度にかなりの違いがある。ここではその違いを問題とせず，社会関係の円滑な維持という共通の目標に対して，日本人とアメリカ人が各々どのようなタイプの言語行動をとるか眺めてみたい。

表—4は，資料から得られた「準定型」を，命題によって分類し，その使用頻度を示したものである。

表—4 「準定型」命題別分類と使用頻度

「準定型」命題	日		米	
	例数	%	例数	%
関係維持	19	22.6%	48	26.4%
友好的祈念 (welfare-wishes)	22	26.2%	48	26.4%
感謝	29	34.5%	50	27.5%
謝罪	14	16.7%	2	1.0%
(接触に対する) 積極的評価	0	0	34	18.7%
合計	84	100%	182	100%

上記の表は，この種の表現の対象に2つの方向性があることを示している。すなわち，次の再会に向けての前向きと，すんだ会合をふりかえる後向きの2つの方向である。表の分類に従えば，「関係維持」「友好的祈念」が前者に，「感謝」「謝罪」「積極的評価」が後者に属する。

使用度という観点にたつなら，未来志向に関して日米間にほとんど相異はなく，相異は過去志向表現に見られ，それも「積極的評価」と「謝罪」表現という対照的項目間に出ている。この違いは，別れの儀礼行動として会合が当事者双方にもたらした影響を確認するに当って，どの側面を言及対象に選ぶことが人間関係にとってより有効であるかについて，2つの社会の間に相異のあることを示唆している。

2．2．表現の特徴

次に各命題ごとに日米の挨拶表現の特徴を見ることとする。

a．関係維持

表—5は「関係維持」に関し，㊐が「関係維持の依頼」と「再接触への意思表示」に表現が分かれるのに対し，㊋は後者に集中し，前者が日本人特有の挨拶要素であることを示している。

日米共通の「再接触への意思表示」に関しても一定の相異が見られる。すなわち，日本では客を送り出す主人側の挨拶として再度の来訪を求める「きまり文句」はあるが，客側のそれは感謝と詫びが主体で再会希望は少ない。主客の立場をはなれても，一般に「隔り」の表示が儀礼上求められることの多い日本では，再会希望表示に対して抑制的で，たまの来訪を

促したり，「いづれ（ジャー）また」などの曖昧表現に托されることが多い。

これに対し，アメリカでは再会希望表示を別れの挨拶の重要な要素とみなす傾向が強く，“see you”の「定型」に加え，多くの再会希望表現が見られる。儀礼書 *Emily Post* でも，パーティで得たばかりの知己に別れを告げるとき，“goodbye”に加え，“I hope I shall see you again.”の再会希望を忘れぬよう忠告しており，再会への熱意を示すことが儀礼上重要なことを示している。日米共に人間関係にとって“keep in touch”の状態であることが望ましいことは一致しているが，日本ではこれを出会いの際に無沙汰の詫びという形で表わす傾向が強いのに対し，アメリカでは別れの際に再会希望や“We really ought to see more of each other.”“It's a shame we don't do this more often.”など接触不十分を嘆く形で表現されることが多い。

表—5 「関係維持」表現の項目別分類と使用頻度

項目		日		米		日	米
		数	%	数	%		
間接的	関係者への「よろしく」表現	3	15.8%	7	14.6%	どうぞ先生によろしくおっしゃって下さい。	Give my love to Annie.
直接的	再接触への意思表示	11	57.9%	41	85.4%	またどうぞお出かけ下さい。	Come any time.
	関係維持依頼	5	26.3%	0	0	荻村さん何分よろしくお願いします。	――――
合計		19	100%	48	100%		

b．友好的祈念（welfare wishes）

表—6は，「別れの挨拶」として日米に共通して相手の well-being に対する配慮表現があることを示す。しかし，ここでも配慮の示し方に興味ある違いが見られる。もちろん表の例文のように日米に共通する配慮表現もある。しかし日本人の親しい間柄では「クヨクヨするな」「ガンバレヨ」と鼓舞激励型の表現がよく使われるのに対し，アメリカ人の間では，“Take it easy.”“Don't work too hard.”とむしろ精を出すなの声をかける確率の方が多い。[6] 更にアメリカ人に特有な配慮の示し方として，自分の目の届かぬところでワルをしてはいかんと“Don't get into trouble.”“Be good.”“Behave yourself.”“Don't do anything I wouldn't do.”と，忠告の形をとることがある。相手の“well-being”のお目付け役を自認し，心理的距離を縮めて見せた親愛表現といえよう。

相手によき時を祈念する挨拶行動が㊋に特徴的ということは「定型」ですでに見た通りだが，「準定型」にも，“Good luck.” “Have a good time(day, evening, weekend, trip).” “Enjoy youself.” など快適な時を望む表現の種類が多い。その使用率は「友好的祈念」表現の56%を占め，㊐が僅かに「よいお年を」1種を記録しているのと対照される。

表一6 「友好的祈念」表現の項目別分類と使用頻度

項目	日		米		日	米
	数	%	数	%		
よき時への祈念	2	9.1%	27	56.3%	よいお年を。	Have a good time.
Well-being に対する配慮	20	90.9%	21	43.7%	気をつけて。	Take care.
合計	22	100%	48	100%		

c．感謝

接触の相互関係に及ぼした好影響をもっとも端的な形で要約してみせるのが謝意表現で，日米共に別れに際して多く使用される。ただ日本人の場合，もてなしには「ごちそうさま」，労力には「ご苦労さま」，手数には「お世話さま」など受けた好意の種類に応じて謝辞形式が一定しており，その他の場合も「いろいろありがとう」と，その要約法が固定して，一律的である。これと対照的にアメリカではその場に応じた個別的な感謝表現が原則として求められ，非個別的な “Thank you for *everything*.” は「誠意」に欠けると，その使用をいましめる儀礼書すらある（Walters, 1970）．㊋資料でも，感謝表現50例中，“thank-you” 型の表現34例が数えられたなかで，21例までが “for” を伴って，感謝内容を明示している（for a nice evening; ～the wonderful time; ～stopping(coming)by; ～having me; ～helping me out ; bringing me home ; ～your time ; ～the coffee and cake, etc.）。

d．謝罪

日本では別れの際に相手の示した好意に感謝すると共に，自分という存在が相手にかけた物質的，精神的負担を十分に認識して低姿勢をとるのが礼儀にかなった行為とされる。従って標準的な暇乞いの挨拶として「お邪魔しました」「おさわがせしました」「突然伺いまして」「ご迷惑をおかけしました」などの詫び表現が「きまり文句」として定着している。同時に好意を示す立場にたつものも，「おかまいしませんで」「失礼しました」と好意を十分に示し得なかった詫びをする。共に接触のネガティヴな側面を自己の非として認め合い関係

の円滑化をはかるという，きわめて日本的な人間関係調整法を示している。㊋にあった別れ際の詫び表現は僅か2例で，別離に際し，別離の原因となった自己の非を詫びるという「儀礼」の範疇をこえたケースのみとなっている。

e．積極的評価

アメリカ人の場合，社会関係の維持にとって接触を positive note でおわらすことが儀礼にかなったこととされる。従って別れの挨拶では相手の友人としてのかけがえのなさ，与えてくれた喜び，共有した時間の楽しさなどが言及の対象に選ばれる。Goffman（1971）のやや皮肉な観察によれば，接触開始点では相手の過当な期待感をそそる「熱意」(enthusiasm) の表示は抑えられるが，「熱意」のあかしをその場ですぐ行動で示す必要のない接触の終了点では，再会にむけて "high praise and substantial offerings can be accorded" とされる。㊋資料でも，これを裏付ける熱意表現が各種認められ（"It was really nice seeing you." "I had a great time." "I enjoyed being with you." etc.），皆無の㊐資料と対照される。ここでもまた人間関係のあり方，とりわけ建前として示すべき距離のとり方について，日米間に違いのあることが示される。

Ⅵ 選択規則

これまでは日米の資料から得られた挨拶の言語要素を実際の使用場面から切離し，形式や機能の上から分類し，その使用頻度をみて来た。これらを使用場面に戻し，そこに働く場面的条件との関連でとらえかえし，一定の挨拶行動がどのような選択過程を経て実現されるものか考察したい。ただし，ここでは紙幅の制約から「定型」のみを取扱うこととする。

挨拶に関する選択行動を考える上で特に重要なのは，場面の物理的側面と社会的側面である。前者には場面の時間的・空間的要素が，後者には挨拶を交わす人間相互の社会的関係の各々が含まれる。

1．物理的場面

1．1．時間的

物理的場面の時間的要素としては，挨拶交換が行われる時刻と，予定される再会までの時間的距離の2つの要素が考えられる。

1．1．1．挨拶交換時刻（表―7参照）

原則として英語では出会いの挨拶に用いられる＜good ＋ 時＞型の「定型」が同時に別れの挨拶にもなり得る。しかし，現代のアメリカでこれらが用いられる状況はきわめて限られ

ており（後述），事実上時間的制約があるのは，夜の別れに用いられる“good night”だけとなる。

㊥資料から得た61の“good night”例は，80%まで，㊐の「お休みなさい」と同じく，夜の別れ，就寝時の挨拶として使われている。残りの使用例は，5，6時頃の退社時間に交換されるルーティン化された別れの挨拶6（後述）と，家人の就寝後に帰宅が予想される夜間の外出時の挨拶5[7]となっている。日本語の「お休みなさい」には，こうした使われ方はなく，この点で“good night”との間に僅かながら使用上のズレが見られる。

1．1．2．時間的距離

時間的距離は次の接触機会までの見通しの問題としてとらえることができる。遠隔の地に移り住む相手とは再会の機もそれだけ制限され，別れの挨拶も明日また会う相手とは自づと異なったものになる[8]。この違いが出るのは主として「準定型」の領域とされるが，「定型」もそれなりの選択制限を受ける。

時間的距離の遠近両方に使えるのは，㊥goodbye，㊐「さようなら」「いってらっしゃい」「いってきます」の各々で，その他は原則的に近い再会を前提とした別れに使われる。「さよなら」と“goodbye”は遠近両方の場合に使えることで共通するが，後者では再会までの距離の短い，あるいは短いことを希望する相手に上昇調のイントネーションが使われる。下降調のイントネーションで短かく発音される“goodbye”は再接触への関心欠如を示すばかりでなく，今後一切の接触はご免の捨てぜりふ[9]，退去要求にもなり得る。「さよなら」にも類似用法はあり得るが，資料的な裏付けはなかった。

1．2．空間的

物理的場面の空間的要素としては，その場所の空間的性格づけと，日本人の場合，ウチ・

表―7　「定型」の時間的使用分布

		日		米
使用時間	制限的	午前	――――	good morning, good afternoon] good day
		午後	――――	
		夜	お休みなさい	good evening, good night
	非制限的	失敬，失礼します，ごめん下さい，サヨナラ，ジャー，ドウモ，ジャーマタ，いってきます，いってらっしゃい		goodbye, bye, bye-bye, so long, see you

ソト空間の把握が問題となる。

1．2．1．空間的性質

学校，職場，家庭，娯楽場など場面の空間的性質によって挨拶行動も自づと制約される。職場などの公的空間では公的役割関係の接触が主体で，私的空間のそれとは異なる一定の“formality”が要求される。㊐資料の中の公的空間の接触場面では，要件伝達→了承（表—1，型—7例），要件伝達→謝意（表—1，型—5例）など「定型」なしの終了が多く，「定型」の使用は，特殊なケース(「家庭的」な事務所）を除くと「失礼します」にほとんど限られている。この点日米共通しており，㊋資料でも職場の役割遂行上起きる接触では，「定型」交換を伴わぬことが多く（表—1，型—4，型—5各例），交換が見られる場合も“goodbye”を主体とする（退社時の挨拶を除く）。

空間共有から生じる接触の頻繁さから，職場・学校などでは終業時の最終接触でルーティン化された挨拶が交換される。日本の職場集団では，「定型」交換にかえて（またはそえて），「お先に」「ご苦労さん」「お疲れさま」といった特定の挨拶表現を定着させており，社会関係の再確認というより，共同作業に従事する連体感の再確認の要素がより強く打出されている。アメリカの職場の終業時の挨拶は，“Goodbye.”“See you(tomorrow).”といった一般的挨拶と並んで，5時6時であるにもかかわらず，“Good night.”の交換が見られる。この選択には仕事の生活の「一日の終り」という職場空間に根ざす時間の把握が見られる。

1．2．2．ウチ・ソト空間

日本人特有のウチ・ソトに分けてとらえる空間把握とそれに伴う対人関係の把握によって，出会い同様，別れの挨拶も条件づけられる。すなわち「ウチ」空間を共有するもの同士の別れには「いってきます」「いってらっしゃい」が交換され，再会までの距離がどんなに予想されても，「ウチ空間」に属すると認識されるものに「サヨナラ」は用いられない。日本人が一緒に暮らす家族に「サヨナラ」を告げることは従って深刻な意味をもつことになる。

「ウチ空間」は，家族関係，職場関係，近隣関係など，生活の一定の場を共有するところに成立する。㊐資料の「いってらっしゃい」の挨拶10例，「いってきます」8例中，家族間で交換されたのは各5例で，残りは隣人同士の出勤時と，職場の同僚間で仕事のための外出時にその交換をみている。

2．社会的場面

社会的場面は，その場に参加する人の性別，年齢の上下，身分の上下，親疎の度合，集団

所属関係などを含む広義の社会的関係で構成される。社会関係が存在するところ，社会通念的に一定の社会的距離がきめられており，挨拶行動もそれに準じて選択されることになる。

2．1．上下親疎関係

英語の別れの挨拶「定型」を「待遇表現」として，「敬体」(＋)，「非敬体」(－) に分類したのが表―8である。個人的面識のある人に対する「普通待遇」“goodbye” “goodnight” をはさんで，右側の表現は社会的距離の少ないくだけた人間関係に使われる「非敬体」，左側は距離の大きいあらたまった人間関係に使われる「(超) 敬体」を示す。今日アメリカで＜⊕敬体＞の使用はきわめて少ないため，事実上選択は＜○敬体＞対＜⊖非敬体＞ということになる。㊗資料でこれを見ると，“bye, bye-bye, so long, see you” がくだけた人間関係に限定されているのに対し，“goodbye” は親疎両関係で使われることを示す。すなわち “goodbye” 使用例 85 中，時間的距離の遠い相手に対する23例を除いた62例では，家族間16，親密な男女間15，親密な同性友人間 6，距離のある間柄25となっている。おそらく “goodbye” 使用の場合，親疎関係の調整は呼称や「準定型」によって行われるものと思われる。同様のことは “good-night”についてもいえる。

表―8　㊗別れの挨拶「定型」の丁重度による分類

敬　体 (＋)	普　通 (○)	非敬体 (－)
good morning good day good afternoon good evening	goodbye good night	bye bye-bye so long see you

＜good ＋ 時＞はかって上下・親疎の観点から距離のある相手に敬遠法として使われ，*Emily Post* などは，レィディが仕事で面識のない男性と面談を行った場合，その終了の挨拶は＜good ＋ 時＞を原則とし，知己に使われる “goodbye” “good night” の使用は慎しむべきと注意を与えている。しかし男女関係をはじめ人間関係全般が開放的となった現在，距離の隔りを強調する挨拶習慣は消滅しつつある。㊗資料に見られた＜＋敬体＞例は，下位者の上位者に対する敬意表現[10]と，上位者の下位者に対する示威表現[11]を含む 6 例にとどまっている。

日本人の挨拶行動は上下親疎の度合で著しく条件づけられており，主として表現の形態的変化によって示されている。表―9は㊐資料の中の「定型」とその異形を「敬体」のプラス・マイナス別に分類したものである。

下の表で注目をひくのは「さよなら」である。㊐資料中「さよなら」の使用が僅か 6 例にとどまるので確定的なことはいえないが，形態的に＜⊕敬体＞をもたないこの語は，成人間で儀礼上「敬遠表現」の求められる相手に対してはその使用が回避される傾向にある。資料中上位者に使われた一例は，子供が友人の母親に使ったもので，あとは対等もしくは目下の

ものにその使用が限定されている。

表—9　㊐別れの挨拶「定型」の丁重度による分類

敬　体（+）	普　通（○）	非敬体（−）
――――	さよなら	――――
それでは	ソレジャー，ジャー	ジャーネ，ジャーナ
ドウモ，ドウモドウモ		――――
いづれまた	（ソレ(イ)）ジャーマタ	――――
お休みなさいませ（し）	お休みなさい	お休み
いって参ります	いってきます	いってくるヨ
いってらっしゃいませ	いってらっしゃい	いっておいで
失礼いたします	失礼します	失敬
ごめん下さいませ ごめん遊ばせ	ごめん下さい	――――

なお挨拶では「定型」の選択と同時に呼称の選択が社会的距離の指標として重要な意味をもつといわれる。特に日本語のように形態的に整った敬語体系をもたない英語でその重要性は一層大きいとされる（Brown & Gilman, 1960；Brown & Ford, 1961）。㊋資料における呼称の使用度をみると，“goodbye” 使用例85のうちの40，“good night” 使用例61の28に呼称の併用がみられ，上下親疎に応じて呼称の選択が行われていることを示している（表—10）。別れの挨拶時の呼称使用は，相手を同定し接触の基調をうち出す出会いほど必要度が高くないことを考えると，50%に近い使用率はかなり高いとみるべきで，待遇表現としての挨拶「定型」の無標化を補う形で作用しているといえよう。これに対し，㊐資料中，呼称併用例は僅か4例（4.1%）にとどまっている。

表—10　㊋呼称使用度

呼　称	goodbye	good night
タイトル＋苗字	13	10
名　前	13	9
親族名（papa, etc.）	5	3
愛情を示す呼びかけ（sweetheart, etc.）	9	6
合計回数	40	28
%	(85例中) 47.1	(61例中) 45.9

2．2．性差・年齢差

英語の別れの挨拶「定型」は，幼児にその使用が制限される “bye-bye” を除けば，あとは年齢・性に関して無標といわれる。しかし㊋資料の限られたサンプルで見る限り，“bye, bye-bye, so long” の使用には，“see you, goodbye, good night” にない性別の片寄りが

見られる。すなわち，“bye”と“bye-bye”の使用は，10例中9，8例中7とそれぞれ圧倒的に女性が多く，しかも後者は幼児語とされながら，実際に年少者自身または年少者を相手に使われたのは2例を数えるにとどまり，年齢に関係なく親密な相手に使われている。このことから，“bye-bye”が単に幼児用の挨拶語ばかりでなく，女性が親密な相手に多用する挨拶語だという可能性が示唆される。これに対し“bye”の使用は特に親密な相手に限定されておらず，「形式ばらない」人間関係に使われており，この点“so long”と相通じる。ただし“so long”は6例中すべて男性使用となっている。もちろんこれらは例数の不足が招いた偶然の片寄りとも考えられるので今後の調査が必要とされる。

日本人の別れの挨拶には性差特徴がよりはっきりした形であらわれる。表—11は㊐資料中

表—11　㊐別れの挨拶「定型」の性別使用

M	M/F	F
	さよなら	
それでは		
ジャーナ	ソレジャー；ジャー	ジャーネ
ドウモ，ドウモ	ドウモ	
	いづれまた (ソレ(イ)) ジャーマタ	
	お休みなさい お休み	お休みなさいませ（し）
いってくるヨ	いってきます	いって参ります
いっておいで	いってらっしゃい	いってらっしゃいませ
失　敬	失礼いたします 失礼します	
	ごめん下さい	ごめん下さいませ ごめん遊ばせ

の「定型」の使用を性別によって分類したものである。このなかで絶対的男性挨拶語は「失敬」「ジャーナ」，絶対的女性挨拶語は「ごめん遊ばせ」に限られる。あとは全体的に待遇表現として有標の挨拶が性別に関係なく使用され，＜⊕敬体＞がより多く女性に，＜⊖敬体＞がより多く男性に各々使用される一般的傾向を示している。

年齢に特徴的な「定型」選択行動としては，若年層では「無標」の挨拶が好まれ，＜＋敬体＞が回避される傾向を示している。また無標の挨拶でも「失礼します」「ごめん下さい」「ドウモドウモ」の使用は子供に見られず，これらが成人社会の挨拶表現であることを示唆している。

Ⅶ おわりに

本稿は別れにおける日米の挨拶行動の言語的側面に焦点をあて，会話の中の位置づけ，表現種類，選択規則の3点にしぼって考察した。社会的接触を円満に終らせ再会への道を確保する儀礼行動として，別れの挨拶が一般の会話終結に不可欠な構成要素をなすという基本点で日米間に相異はない。ただ，具体的な言語行動において，どのような配慮を示すことが社会・人間関係の円滑化につながるかに相異がみられる。その相異を生み出す一番大きな要因として浮かび上るのが日米間の社会的・心理的距離の操作法の違いである。すなわち，日本人の場合，認知される距離から一歩退き「隔り」をもって関係維持をはかろうとするのに対し，アメリカ人はむしろ「隔り」をうめる方向に働きかける。これは単に「定型」の<⊕敬体>の使用度の差といった言語形式上の違いばかりでなく，別れの挨拶の「きまり文句」の内容的違いとしても出ている。

Brown & Levinson (1978) は人間関係の円滑油となる politeness にポジとネガの二面があり，前者が相手の連帯欲求を満たすことに重点をおくのに対し，後者が相手の顔をたてることに重点をおき，それぞれ異った politeness strategies によって行動化されることを指摘している。もとより日本人もアメリカ人も，それぞれの場面的条件に応じてこの2種の strategies を使いわけているわけだが，別れの挨拶場面に定着した儀礼表現においては，明らかに日本人はネガ，アメリカ人はポジ志向を示している。ちなみに Brown & Levinson があげた両者の特徴的相異の幾つかは，そのまま日米の別れの挨拶行動を特徴づける相異の要約とみなすことができる。

positive politeness strategies	negative politeness strategies
1. 相手の興味などに対する積極的関心	1. 慣習を重んじ抑制的
2. 連帯関係を示す言語行動	2. 形式的，間接的表現
3. 楽天的基調	3. 悲観的基調
4. 相手の同意希求	4. 迷惑，負担に対する最大限の配慮
5. 共通の基盤強調	5. 敬意表現
6. 約束，申出。	6. 詫　び

ここに見る違いは単に別れの挨拶ばかりでなく出会いの挨拶にも認められたものである。人間関係維持のために儀式化された言語行動には，その社会のたてまえ的な人間関係のあり方が示唆されるという仮定にたって挨拶表現をみるとき，そこに示された日米の相異の語りかけるものは大きい。

注

(1) ㊋資料：30分もの*Rhoda*シリーズ．8；*Maude* シリーズ8．60分もの *Bob Newhart* シリーズ2；*Mary Tyles Moore* シリーズ3；*I Love Lucy*シリーズ2；*Days of Our Lives* シリーズ 4；*Rockford Files*；*White Shadow*；*Marcus Welby, M. D.*；*Shirley*；*Missing in Action.* 映画90分もの *All My Darling Daughters*；*Hayburners.* 120分もの *Love, American Style*；*Marathon*；*Oh God*; *That Touch of Mink*；*Gidget*；*The Suicide's Wife*；*The Other Side of the Mountain*；*Miss Annie Rooney*；*House Calls*；*Teacher's Pet*；*Up the Sandbox*；*Cash McCall*；*Mirror, Mirror*；*Where Love Has Gone*；*Barnaby's Niece.*

(2) ㊐資料：『女のそろばん』4本；『旅立ちは愛か』4本；『オレンジ色の愛たち』4本；『ご近所の星』4本；『甦る日々』3本；『愛は悲しき笛』1本；『愛と喝采と』1本

(3) 終了意思表示（暗）示の言語要素として英語でよく用いられるのは，ゆっくり下降調のイントネーションで発音される "Well...," "OK..." あるいは己むを得ず会話を打切らねばならない理由（"I've got to go now..."）などである。日本語の場合，「ソレジャー」「ジャー」,あるいはもっとあらたまった「私これで失礼します」といった表現が用いられる。日本語の場合，これらは同時にそのまま挨拶表現としても通用する。今回の分析では，会話の終結部導入点に，他の挨拶表現に先立って用いられている場合は終了意思表示とし，終了点にあらわれた場合は挨拶表現として扱っている。

(4) "See you *next week.*" "See you *at the office.*" など，〔see＋you＋具体的日時（または場所）〕は，「準定型」として "See you." から区別している。

(5) 表―1で扱った例数㊐86，㊋130が表―3において㊐84，㊋131に変わっている理由は，表―1の例数には，会話の先行しない挨拶例が含まれず，そのかわり挨拶のない会話場面が含まれているのに対し，表―3は前者を新たに含め，後者を除外しているためである。

(6) 資料にはなかったが米語でも日本語の「ガンバレ」に似た表現 "Hang in there." が気のおけない男性同士の挨拶に使われる。

(7) 次のような会話での"good night"用法：

（デェィトに出かける娘と男友だちを前に）

祖父：You'd better get going now. You'll be late.

孫娘：Oh I'm all ready. Good night, Grand pop.

父：Good night, darling.

男：Good night, Mr. Rooney.　　映画：*Miss Annie Rooney*

父：Good night, Martin.

(8) 次の例は時間的距離の遠近がいかに挨拶の選択行動を条件づけ，"goodbye" と "good night" の使いわけとなってあらわれるか示している。

（場面：Emily の家；人物：Emily：中年女性；John：Emilyの前の夫；Paul：Emily の現在の夫；映画 *Love, American Style* より）

Emily：Look,I don't want to talk about it any more. I'm going to bed. Good night,Paul. Goodbye, John.

John：Goodbye, Emily. I'll write and the support checks will come.....

Paul：Well, I suppose this may be goodbye. Probably I won't see you again for a while, but best of luck.

John：Thank you.

Paul：I guess I'd better go upstairs. Goodbye.

John：Goodbye.

(9) 決定的な別れの "goodbye" 例

女：In fact, I won't marry you like this.

男：That sounds final.

女：It is. Góodbye.（退去）　　TVドラマ：*Shirley*

(10) <⊕敬体>の上位者に対する敬意表現例。（A：財界の長老，B：青年実業家）

A：I want to say this, Mr. McCall. You bought yourself a good company.

B：Well, I am happy that you're happy, Mr. Austin.

A：I couldn't be happier.

B：Good afternoon, sir.（握手）

映画：*Cash McCall*

(11) (⊕敬体>の下位者に対する示威表現の例。(A：大学教授；B：態度の悪い生意気な学生)

A：If I give you a B, will you stay away from this class?

B：I'll settle for a B, sure.（着席のまま）

A：（退出を促して）Góod day, Mr. Brunswick.

B：（躊躇しながら立上る）

A：（たたみかけるように）Góodbye, Mr. Brunswick.

映画：*The Suicide's Wife*

参　考　文　献

Albert, S. & Kessler, S. (1978). "Ending social encounters," *Journal of Experimental Social Psychology*, 14.

Brown, R. & Ford, M. (1961). "Address in American English," *Journal of Abnormal & Social Psychology*, Vol. 62, No. 2.

Brown, R. & Gilman, A. (1960). "The pronouns of power and solidarity," In T. A. Sebeok (ed), *Style in Language*, New York : MIT Press.

Brown, P. & Levinson, S. (1978). "Universals in language use : Politeness phenomena," In E. N. Goody (ed.), *Questions and Politeness*, London : Cambridge University Press.

Clark, H. H. & French, W. (1981). "Telephone goodbyes," *Language in Society*, Vol. 10.

Ferguson, C. A. (1976). "The structure and use of politeness formulas, " *Language in Society*, Vol. 5, No. 1.

Firth, R. (1972). "Verbal and bodily rituals of greeting and parting," In J. S. La Fontaine (ed), *Interpretation of Rituals*, London : Tavistock.

Goffman, E. (1963). *Behavior in Public Places*, New York : Macmillan.

_____. (1971). *Relations in Public : Microstudies of the public order*, Harmondsworth : Penguin.

Greif, E. B. & Gleason, J. B. (1980). "Hi, thanks and goodbye : more rountine infromation," *Language in Society*, Vol. 9.

Hymes, D. (1972). "Models of the interaction of language and social life," In J. Gumperz & D. Hymes (eds), *Directions in Sociolinguistics : the ethnography of communication*, New York : Holt Rinehart & Wilson.

Knapp, M. L., Hart, R. P., Friedrich, G. W. & Schulman, G. M. (1973). "The rhetoric of goodbye : verbal & nonverbal correlates of human leave taking," *Speech Monographs*, 40.

小林祐子 (1981).「日本人とアメリカ人の挨拶行動—出会いの挨拶」比較文化研究所『紀要』 42.

Post, Emily (1937/69). *Etiquette*, 3rd. ed., New York : Funk & Wagnalls, new edn., Cassells.

Schegloff, E. & Sacks, H. (1973). "Opening up closings, "*Semiotica* VIII.

Walters, Barbara (1970). *How to Talk with Practically Anybody about Practically Anything*, New York : Dell Publishing Co. , Inc.

〔短期大学部教授（英語学）　1979年度個人研究員〕